

Title	村ソヴェト選挙と農村コムニスト(1924-1927年) : 農業集団化の歴史的前提について
Sub Title	Elections of village Soviets and rural communists in Russia (1924–1927) : preconditions for collectivization of agriculture
Author	奥田, 央(Okuda, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.111, No.3 (2018. 10) ,p.259(45)- 289(75)
JaLC DOI	10.14991/001.20181001-0045
Abstract	<p>1924年の党中央委員会10月総会は、「ソヴェト活発化」を宣言し、それまでの農民に対する暴力的、恣意的な統治を終わらせた。しかし党・政府の突然の政策変更は、農村コムニストの不满を引きおこした。本稿は、その後1926–1927年に党が「ソヴェト活発化」の政策を事実上放棄していく過程を論じ、その過程のなかで、戦時共産主義下の農村コムニストに特徴的な「クラーク清算」の志向が基本的に維持されたことを実証する。</p> <p>The October Plenum (1924) of the Central Committee, demanding the liquidation of the remnants of "War Communism," resolved that non-party peasant activists should be promoted to the leading posts of local Soviets. It was the cassation of the 1924 election results during the winter of 1924–1925 that led to the "Revitalization of the Soviets." The abrupt change in the government authorities and the Party's tactics either bewildered or dissatisfied the local rural Communists who occupied administrative salaried posts in the countryside. This article describes how the Party practically abolished the policy of "Revitalization of the Soviets" and how this led to the preservation of the arbitrary and violent approach to ruling the peasantry up until the years of collectivization.</p>
Notes	特集 : 20世紀のソヴェト農民と農村社会
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20181001-0045">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20181001-0045</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 村ソヴェト選挙と農村コムニスト（1924–1927 年）

——農業集団化の歴史的前提について——

奥田央\*

## Elections of Village Soviets and Rural Communists in Russia (1924–1927):

Preconditions for Collectivization of Agriculture

Hiroshi Okuda\*

**Abstract:** The October Plenum (1924) of the Central Committee, demanding the liquidation of the remnants of “War Communism,” resolved that non-party peasant activists should be promoted to the leading posts of local Soviets. It was the cassation of the 1924 election results during the winter of 1924–1925 that led to the “Revitalization of the Soviets.” The abrupt change in the government authorities and the Party’s tactics either bewildered or dissatisfied the local rural Communists who occupied administrative salaried posts in the countryside. This article describes how the Party practically abolished the policy of “Revitalization of the Soviets” and how this led to the preservation of the arbitrary and violent approach to ruling the peasantry up until the years of collectivization.

**Key words:** Soviet, communist, elections, NEP, collectivization

**JEL Classifications:** N90, N94, R59

---

\* 東京大学名誉教授  
Professor Emeritus, The University of Tokyo

## 1. はしがき

旧ソ連の（したがって現代ロシアの）農村の大きな枠組みをつくりだした1つの歴史的な前提が1930年代初頭の農業集団化であったことに大きな異論はないであろう。それは、政治社会を全面的に巻き込み、農村の根底的破壊と新建設という二面の特徴をもっていたために、その歴史的評価は複雑なものにならざるをえない。ここでは、しばしばスターリンの評価が引き合いに出されてきた。スターリンは、ロシアの伝統に根づいた「上からの革命」の概念を用いながら、集団化は、「上から、国家権力のイニシアチヴによっておこなわれた」「革命」であったと規定した（以下、ゴシック体は原文の何らかの強調、傍点は筆者のもの）。権力の発動による革命というこの規定は、大事件の中心人物自身による告白的な総括であるだけに、実際、歴史認識にとってのその意義は測り知れなく大きい。

もちろんスターリンは、「何百万の農民大衆の下からの直接的な支持」を同時に強調したために、西側やポスト・ソヴェト期においては命題のこの側面は一貫して研究者には不評であった。しかし、もし国全体を揺るがす巨大な変革が「下からの支持」なしに、モスクワの命令だけで遂行できたとすれば、農業集団化は架空のお伽噺になるであろう。後者のスターリンの評価を否定したままでそれに代わる説明を与えない議論は、みずから集団化はわからないと白紙の答案を提出することと全く同じである。

複雑な側面をもつ問題を独特の視角で解決したソ連時代の例がある。今は研究史的な意義しかないが、ブレジネフ時代に党中央委員会科学部長であったエス・ペ・トラペーズニコフが試みた研究の方法がそれである。彼は、「上からの革命」という規定そのものを否定し、集団化のイニシアチヴは農民自身にあり、党はその「激情」を支持し、農業の再建を助けただけであるという視角を提起した<sup>(2)</sup>。

これがスターリンの大きな修正であることを彼が自覚していたかどうかは分からない。しかし、これもまた別の極にあるお伽噺であった。それに対しては、コルホーズに加入しない農民への弾圧と、頻発した農民の直接的な暴動についてのアルヒーフ資料や同時代人のリアルな回想、あるいは飢饉に終わるその結末など無数の史実とそれらの関連を指摘することが可能であり、彼の命題を覆す資料はあまりにも厩大である。

---

(1) これは1938年のいわゆる『党史小教程』（История ВКП (б). Краткий курс. М., 1945. С. 291–292.）の一節であるが、慣例にしたがっておく。

(2) Зеленин И.Е. Сталинская «революция сверху» после «великого перелома». 1930–1939. М., 2006. С. 3. なお、イリヤ・ゼレーニンがここで根拠としてあげたトラペーズニコフの Вопросы истории КПСС. 1967. № 11. С. 32–46 の論文では上の論旨は明確ではない。しかし当時の研究状況の証人としてのゼレーニンの指摘を尊重することは、異なった重要性をもっている。

問題はおそらく「支持」の理解の仕方にある。それを考える場合には、コムニストや彼らを支持する貧農の積極的な、とりわけ行動的な促進を意味する支持だけではなく、抵抗もせず反対もしないという意味での消極的な黙認や従属にいたる、「抵抗」に接する、判別の困難な境界部分を含めた多くの形態を考慮に入れながら、「支持」の問題を考えなければならない。

それはたとえば次のように敷衍することができる。集団化には穀物調達が行先し、集団化の開始後も両者は並行的に進んだ。穀物調達は経営者たる農民の背骨を打ち砕いていた。コルホーズ加入を目前にしていた農民は、経営的な展望を失い、多くの地方で飢餓さえ蔓延していた。この現実から逃れたいと望まない農民はいなかった。個人農としての展望が閉ざされ、都市へ脱出するか、コルホーズに加入するか以外に選択の余地がなくなっていく客観的な過程は追求が可能である<sup>(3)</sup>。飢餓の恐怖を理解すれば、さらに、個人農としての道を歩んで富裕になった農家が目前で「クラーク清算」されるのを見た農民の驚愕を理解すれば、彼らが、たとえ未知のものであってもコルホーズの道を選択したことに想到できるであろう。

さらに、「われわれは沈黙することにも慣れてるし……、すべてのものとすべての人に卑屈に服従することにも慣れてる。大昔から農民は公侯の税、軍司令官の税、タートルの貢租、地主とツァーリのオブローク〔年貢〕等々にも慣れてる。ロシアの農民は、草鞋履きの自分あるいは裸足の自分を絵画のなかに見ることに慣れてるし、いい靴は要らないと考えることに慣れてる」と農民に語らせた<sup>(4)</sup>歴史的慣性の力を考察することさえ必要であろう。

しかし本稿の関心は、これらの「支持」のなかでもっとも突出した支持のケースにある。「下からの支持」を考える場合に、「下」という語で、どの部分を念頭に置くのかという問題がある。ここで課題は、積極的な支持層、すなわち底辺の党活動家、1928年からは穀物調達の実行者、まもなく「クラーク清算」に参加し、集団化を直接に準備した人々を対象として、彼らの背景を考察することである<sup>(5)</sup>。彼らは、歴史のなかでは、ふつう党の細胞や地方組織、下部のソヴェト機関などの名前が登場し、その顔があらわれることの少ない人々である。ある意味では、コムニスト（厳密に言えば、共産党員と同候補をさす）という「人々」は、農民以上に取り上げられることが少ないともいえよう。彼らの歴史を革命期にまでさかのぼることは今はできない<sup>(6)</sup>。われわれのここでの課題は、農民との本格的な接触が試みられることになった1924年以降での農村コムニストの状況を考察することで

---

(3) 筆者の旧著（『ヴォルガの革命——スターリン統治下のソヴェト農村』、1996年）もそのような試みであった。

(4) 言葉は1928年のヴォロネジ県の農民のもの（Трагедия советской деревни. Т.1. М., 1999. С. 466.）。

(5) 本稿は農村コムニストに焦点を合せているが、1924年～1925年のソヴェト選挙そのものに関する専門論文を現在、準備している。同時に参照されたい。それについては、さしあたっては、奥田央「1920年代ロシア農村の社会政治的構造（2・完）」（『経済学論集』東京大学経済学会、第80巻第3・4号、2016年）56-78頁を参照。

ある。

1921年に開始されたいわゆるネップの最大の目的は、それ以前の戦時共産主義の時期に決定的に毀損された農民の信頼を取り戻すことであつた。<sup>(7)</sup> そのときに加えられた暴力と収奪を農民が忘れるには、1920年代はあまりにも短かつた。ところがネップの開始期の生産力の水準は、工業においても農業においても歴史に類を見ない最悪の状況にあつた。みずからへの農民の信頼を取り戻すことを目指したはずの権力は、農村の利益よりもみずからの維持、存続を優先して考えざるをえなかつた。

徴税を税に変えたネップであつたが、農民が負つた納税義務は弱体な彼らの能力を超えていた。この状況は、一方では徴税のための党組織の恣意的な行為、他方では賄賂などの汚職を必然化し、農村は全体としてまだ無法状況のなかにあつた。ネップを採択した第10回党大会は臨時的な措置が必要であることを予感していた。その決議には次のような、意味深長な一節があつた。——「党は、必要な場合に、戦闘的指令のシステム（система боевых приказов）へ移行できるだけの十分な柔軟性をもたなければならない」<sup>(8)</sup>。

## 2. 「ソヴェト活発化」の政策はいつはじまつたか

1924年10月には新しい村ソヴェト規則が採択され、そこには、農民自身が地域の統治に積極的に参加する理念が謳われていた。直後の党中央委員会10月総会は、農民との亀裂を深める農村統治のあり方を根底から改めることを課題としていた。「戦時共産主義の残滓」と闘うというスローガンがそれである。党があまりに農村に足場をもっていないために、農民のなかから政治的な積極分子（アクチーフ）をソヴェトに登用することが必要であつた。<sup>(9)</sup> 決議では明示されなかつたが、「選出制のよりいっそう正しい遵守」というその文言は、それまでの「任命制」、すなわち地域の統治機関である地方ソヴェトへのメンバーの選出（ソヴェト選挙）が党組織や上部機関の「押しつけ」によつておこなわれてきた現実を改め、ソヴェトの活動へ上から不法な介入をしないことを意味した。

地域の統治、ソヴェトの統治に農民自身が積極的に参加すること、これが、いわゆる「ソヴェト活発化」の政策の中心部分をなしていた。「ソヴェト活発化」がこの10月総会を画期とするものについてはこれまで何の異論もない。しかもこのとき、9月にはじまつた1924年のソヴェト選挙キャンペーンが進行中であつた。

---

(6) なお、奥田央「1920年代におけるソヴェト農村のコムニスト」（『経済学論集』東京大学経済学会、第73巻第1号、2007年所収）、同「ネップと農村コムニスト」（『プロジェクト研究』早稲田大学総合研究機構、第13号、2018年、所収）などを参照。

(7) 戦時共産主義期の農村の状況については、梶川伸一『ボリシェヴィキ権力とロシア農民——戦時共産主義下の農村』、1998年を参照。

(8) КПСС в резолюциях. Изд. 9-ое. Т.2. М., 1984. С. 327.

(9) Там же. С. 302.

しかし、党が新路線を宣言することで合意したこと、それが現実動きはじめることは別である。実際には、1924年のソヴェト選挙は、10月総会の決議の方向に沿ってではなく、これまでと同様の、否、これまでの「任命制」が行き着いた姿を示しつつあった。農村の党細胞や党フラクションといった党組織があらかじめ作成した候補者のリストを、選挙キャンペーンの推進者は選挙集会で農民に強要していたのである。

「ソヴェト活発化」がこのように1924年の党中央委員会10月総会においてではなく、現実には時間的なギャップをもってはじまったことから論じることしよう。この微妙な時間的なギャップのなかに多くの時代の問題が集約されていた。

「ソヴェト活発化」の実施の実情を身近に知悉していた党の要人は、「ソヴェト活発化」が10月総会ではなく、その2カ月後、1924年選挙の結果を破棄することからはじまった、と口をそろえた。たとえばハタエーヴィチは次のように記した。「1924年秋の選挙は、いたるところで旧式のやり方でおこなわれた。選挙が11月に、すなわち中央委員会〔10月〕総会のあとでおこなわれたところでさえ、総会の決定は、選挙の過程にいかなる影響も決して及ぼさなかった。選挙破棄に関する中央執行委員会の決定〔1924年12月29日付〕は……党組織が総会決議をより決定的に遂行する方向へ転換するという意味でもっとも重要な役割を演じた<sup>(10)</sup>」。

このことに関してカガノーヴィチもまた、のち1928年10月の全連邦ソヴェト選挙問題会議において当時を回顧し、ソヴェト活発化の政策は「多くの県で、間違ったソヴェト選挙を破棄したことから事実上はじまった」と語った<sup>(11)</sup>。これは、ソヴェト活発化を宣言した1924年の10月総会をきっかけにそれが直接にはじまったのではないと認めたものである。

カガノーヴィチは全く同じことを、1930年1月、全面的集団化の開始の時期にも語った<sup>(12)</sup>。このときは、個人農の影響を残している村ソヴェトが集団化に消極的であるか、あるいは抵抗さえしているために、その状況へ上から介入して村ソヴェトを再選挙させることが緊急の課題であった。カガノーヴィチは、1930年冬に部分的再選挙へ向けて上から介入することが緊急に必要であることを強調するために、5年前の1924/25年冬の情勢をもちだしたのであり、このかつての再選挙もまた上からの介入であったことを事実上認めたものでもある。両者の時期が比較の対象となりうることについては、別の論点でもまもなく考察することになる。

「ソヴェト活発化」が10月総会（25～27日）によってではなく、その2カ月後の1924年選挙結果

---

(10) На аграрном фронте. 1925. № 5-6. С. 208. 著者名は М. Х. 疑う余地なくメンデリ・ハタエーヴィチである（根拠は略）。

(11) Всесоюзное совещание по вопросам переыборной кампании Советов 1929 года. М., 1929. С. 6.

(12) Совещание о новых задачах советов в связи с широко развернувшейся коллективизацией в деревне. М., 1930. С. 63.

の破棄によってはじまったのはなぜか。<sup>(13)</sup>第1に、村ソヴェト選挙の大半——内務人民委員部統計課の資料によれば、87% (61 県中 53 県)<sup>(14)</sup>——が、9月と10月のうちに終了していたからである。第2に、総会決議が現地の農村にまで届くのに時間がかかったからである。内務人民委員ペロポロドフは、1925年1月にジノヴィエフに送った書簡のなかで、この問題を次のように明らかにした。「大半の選挙は……9月と10月におこなわれ、全くわずかな部分だけが11月におこなわれた。11月4日に『プラウダ』に]公表された中央委員会の指令〔10月総会決議のこと〕は、もしそれが末端の農民にまで届くのに1カ月かかったとするならば、大半の県ではそれは選挙が終わったか終わりに近づいたときに着いた。したがって、それは決定的な意義をもつことはできなかった」と。<sup>(15)</sup>

ここでは「末端の農民」とだけ指摘されているが、下部の党組織にとっても、村ソヴェト選挙の大半が早く終わっていたこと、総会決議の到達が遅れたことなど事情は同じである。彼らは、たとえ党会議の決議を早く知ることがあっても、農民のイニシアチヴを尊重する、命令はいけない等々の一般的な言葉は聞きなれており、何か大きな変化が起こったとは考えなかった。あるいは後述するように、そう考えなくなかった。12月中旬から県、州、地方委員会で農村細胞会議が開かれ、それによってやっと本格的な党組織への周知が図られた。<sup>(16)</sup>

しかしそれでも新しい認識の下部への浸透は遅々としていた。たとえばクルスク県委員会の機関誌は、半年遅れの1925年4月になって、10月総会の決議を「きわめて多くの細胞が知らない」として、その全文を掲載した。<sup>(17)</sup>その困難は、スターリン自身が当初からよく理解していた。中央委員会10月総会においてスターリンは早くもこう述べていた。「ソヴェト活発化については多くが語られている。しかし、もしこれが上からはじめられないならば、もし中央執行委員会、中央執行委員会幹部会やその他の中央のソヴェト機関が地方に見本を示すのでなければ、いかなるソヴェト活発化も地方ではありえないだろう」。<sup>(18)</sup>

下部の党の転換が遅れたことについてはいっそうの考察が必要である。ハタエーヴィチは、前出の引用文(49頁)に続けて重要な指摘を残した。「実際には、まさに選挙のやりなおしという問題において、かなり著しい数の党組織が相当の保守性をあらわしたということを完全に確認できる」と。この「保守性」については、いくつかに分けて考えることができる。

---

(13) 以下に見るように、多くの地方で1925年の再選挙によってはじめて「農村に<sup>おもて</sup>面を向けた」ということができる。См.: Сельсоветы и волисполкомы. Под ред. Я. Яковлева и М. Хатаевича. М.-Л., 1925. С. 23.

(14) Избирательная кампания в Советы РСФСР в 1924–1925 гг. Предварительные итоги. Вып. 2. М., 1925. С. 10.

(15) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 94. Л. 204 об.-205.

(16) На аграрном фронте. 1925. №5–6. С. 202.

(17) Известия Курского губкома РКП (б). 1925. №8–9. С. 5–10.

(18) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 154. Л. 34 об.

第1に、それは前述の戦時共産主義期からの重い惰性を原因としていた。彼らは農村を支配し命令することにあまりにも慣れていて、国内戦の時期に、コムニストは、農民の抵抗に対して非常権力機関が採用する様々な措置に参加し、無制限の権力を与えられた。そのため、彼らは農民との関係をすべて力づくで解決する習慣が身についていた。1920年代の農村の現場においても、何の公的な権限ももたない党書記が、農村の任意の施設で、農民のいる任意の場所で、家宅搜索をおこない、押収し、逮捕しても咎められることはなかった。

第2に、コムニストをとりまく状況は、決してたんなる惰性にとどまるものではなかった。食糧税へ移行しても、1921-1922年の飢饉に象徴される経済的関係の全般的な崩壊のために、税の徴収そのものが困難をきわめ、その徴収の実態は以前の徴発制と何ら異なるところがなかった。1922年10月に、シンピルスク県執行委員会議長は「食糧徴発と区別される食糧税を農民が全く理解していないこと」を論じた。それは、法によって規定されている播種面積による課税ではなく、「農戸別の課税」すなわち農家の巡回による徴発がおこなわれていたからである。その任にはしばしばコムニストがあたった。しかしそれだけではなかった。県は、穀物税の供出に応じない村に対しては、農家への兵士の宿泊にいたる全村に対する軍事的な強制措置を辞さなかった。このような措置が、<sup>(19)</sup> ネットを導入した第10回党大会自体によって予定されていたことは前述のとおりである（コムニストの「保守性」に関わる第3の点のはのち59-63頁で論じられる）。

1924年12月から1925年1月にかけての農村の実態を、タンボフ県を例に読者に提示しておく。これは、オ・ゲ・ペ・ウが党中央委員会に宛てた報告書の一部である。

「タンボフ県の農民の政治的雰囲気の規定要因は農業税の徴収である」。農業税収入を増やすために、不払い者に対して、いたるところで大量の逮捕、財産の差し押さえ、その競売といった弾圧措置が適用されていた。同県タンボフ郡では、徴税の突撃トロイカ（ударные тройки）は、クラークであろうが、中農であろうが、貧農であろうが、一人残らず財産を差し押さえた。全く支払い手段をもたない若干の貧農は、われわれを餓死させようとしている、と語った。資産の差し押さえに際して、負債者に支払いの猶予が与えられず穀物、家畜、衣服が取り上げられた。延期してくれという願いは顧みられなかった。1人の貧農・牧夫からの没収に際してライ麦が最後の1粒まで奪い取られ、この貧農は（暴行がおこなわれたのであろう）その場で心臓破裂で死亡した。地方権力\*が貧農を擁護しようとする、突撃グループはキャンペーンの怠慢と妨害であると村ソヴェトに対して<sup>スレイフ</sup> <sup>アクト</sup> 調書を作成した。

\*なお、ここで「地方権力」といわれているのは村ソヴェトを指している。多くの場合、村ソヴェトの基本的な活動は徴税でしかなかった。ところが任務を帯びて外から来た「突撃グループ」の農民に対する

---

(19) Лютов Лев. Власть и общество в годы НЭПа (1922-1929) через призму настроений провинции. Ульяновск, 2010. С. 10.



態度がこのように度を越したときには、村ソヴェトはそれに抵抗をすることがあったことが示されており、興味深く、かつ重要である。

タンボフ郡イヴァノフカ村では、不払い者に対して突撃グループによって10ルーブリ以上の罰金が課せられ、さらに追加的に資産の没収もおこなわれた。グループの全権は、差し押さえに際して口汚く罵りながら穀物を1粒にいたるまで没収し、その結果、多くの家族が決定的に飢えていた。農民のあらゆる懇願に対してグループのメンバーの1人は、「どけ」の一言で対応した。突撃グループは、見せしめのために、ある農民を裁判にかけ、裁判所は、第2期の納期に税を適時に支払わなかったと16ルーブリ35コペイカの罰金と2年の投獄、別の農民には、同様の罰金と6カ月の投獄を宣告した。ところが実際には、2人は期限通りに税を支払っていた。この農民を悪辣な不払い者として裁判にかけると村ソヴェト議長と郷執行委員会メンバーが結論したのは、突撃グループの1人の脅迫によるものであった。

同県ポリソグレプスク郡アルカトカ村に徴税の突撃グループが夜の10時にあらわれ、村ソヴェト代表に対して村ソヴェト員全員と班長<sup>デシャートニキ<sup>(20)</sup></sup>をただちに集めるよう命じ、村の全農民を集めた。農民があらわれると、突撃グループは、すべての税を支払うよう命じ、もてるものであろうが、もたざるものであろうが、お構いなしに税の完納を半時間で終えるよう言明し、こういった。「半時間後に納めなければ、どうなるか明日知ることになるう」。農民はカネを手に入れようと狂奔し、パニックは朝4時までつづいた。朝、突撃グループは、資産の没収にとりかかり、豚、衣服、女の下着が取り上げられた。<sup>(21)</sup>

タンボフ県は際立った例であるが、これは徴税にともなう弾圧であるから、このようなケースは程度の差こそあれ一般的な現象であった。多くの県で、郷執行委員会に「徴税部隊」(«отряды по перекачке налога»)が組織された。税負担は農民の能力に相応しておらず、力のない経営への圧力が強まった。貧農は「がらくた」<sup>スカルブ</sup>の家財道具まで奪いとられた。没収された物品が売られる競売には、ふつう農民自身が参加を拒否した。ここには郷執行委員会のメンバーが姿を見せる場合があった(活動家が「クラーク」の資産を奪った、のちのクラーク清算の時期を想起させる)。没収された家畜は世話がされないうちにしばしば斃死した。税の支払いのためにカネを得ようとして家畜が大量に売り出されたため、税のキャンペーンの期間に、家畜の総数が著しく減少した。<sup>(22)</sup>

情勢は戦時共産主義期を髣髴とさせるものであり、まもなく1928、29年にはじまる農村への攻

(20) 「村ソヴェト代表」や「班長」については、前掲「……社会政治的構造(1)」(『経済学論集』第80巻第1・2号、2015年)5、32-33頁を参照。

(21) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 84. Д. 858. Л. 37-38.

(22) «Совершенно секретно»: Лубянка-Сталину о положении в стране. Т.3. Ч.1. М., 2002. С. 122-123. これは1925年2月の情勢とされているが、前述のように、1924年12月-1925年1月のそれと同じである。

勢の状況そのものである。それは、「ネップ」と似ても似つかない状況であった。ここでまず、末端のコムニストは、条件さえ与えられれば、手段を選ばず弾圧措置を情容赦なく農民に加える用意があったことを確認しておかなければならない。

こうして1924年10月総会のあとも状況は悪化しつつさえあった。

### 3. 転換

政策の新たな段階は1924年末にやってきた。ソ連中央執行委員会幹部会は、1924年12月29日付の決定で選挙参加の不十分なソヴェト選挙を破棄してそれをやり直すことを指示し、翌年1月16日付で、やり直すべき選挙を、参加率35%を下回った選挙、あるいは農民の正当な訴えがあった選挙と具体化した<sup>(23)</sup>。それは、まるで、「上から」「地方に見本を示す」ことが必要だとした10月総会でのスターリンの言葉（前述50頁）にしたがったかのごとくであった。実際にも、カガノーヴィチやモロトフはのちに何度か1924年選挙結果の破棄には党（中央委員会）の意思決定が働いていたと証言した<sup>(24)</sup>（中央委員会政治局は、部分的な再選挙について、中央執行委員会の会議の5日前、1924年12月24日に審議した<sup>(25)</sup>）。

これは、「保守的」に身を守っていた地方のコムニストに対する強力な一撃となった。その記録が残されている。トヴェーリ県ルジョーフ郡の党委員会書記は選挙破棄の決定が出たときのことを次のようにいいあらわした。「農村では爆弾が炸裂したようだった。同志たちは不意を突かれ、何が問題になっているのか分からなかった<sup>(26)</sup>」。しばらくたった1925年5月の第3回ソ連ソヴェト大会の高い演壇では、ウクライナの代表が次のように発言した。「選挙が破棄されたとき、われわれ地方の活動家は強く抵抗した。次の新しい〔定例の〕選挙キャンペーンまですべてを変更しないでおきたいと思った。そして、上部機関の圧力でこの〔2度目の〕選挙をおこなった。このときわれわれはどれだけ間違っていたか、連邦政府がいかに正しかったかを実際に見たのである<sup>(27)</sup>」。

最後はもちろん最高のソヴェト大会向けの儀式的なお世辞である。選挙の破棄はまだ打撃の端緒にすぎなかった。農村コムニストは1924年末から翌年中頃まで彼らに不利な条件に次々と遭遇することになった。

---

(23) СЗ СССР. 1925. № 1. Ст. 3; № 6. Ст. 54.

(24) Всесоюзное совещание по вопросам перевыборной кампании Советов 1929 года. М., 1929. С. 6 (Л. М. Каганович); Правда. 4 января 1927 г. (В. М. Молотов)

(25) Политбюро ЦК РКП-ВКП (б). Повестки дня заседаний 1919-1952. Т.1. М., 2000. С. 349.

(26) Рязанцев Н. П. Перевыборы советов в общественно-политической жизни советской деревни в середине 20-х годов. Ярославль, 1992. С. 24.

(27) 3-й съезд Советов Союза ССР. Стен. Отчет. М., 1925. С. 295.

まず1924年11月23日～1925年1月15日の農村党組織の「点検」がそれであった。広く意見が求められたその経過は党中央委員会の機関紙『プラウダ』、『貧農』、『農民新聞』で詳しく報じられた。この間、全体として約3000通の手紙が新聞編集部へ送られた。たとえば『プラウダ』はそのうち1435通を受け取り、300通を紙上で公表した<sup>(28)</sup>。全体の13%にあたる非党員農民の手紙は、党の活動の否定的な側面——農民からの乖離、恣意的な行動、10月総会の指示を理解していないことなど——を指弾するものであった。

それは党中央によって促進されていた。スターリンは、1月、くりかえし「2つに1つ」と問題を立て、農民（と労働者）に党組織の活動を批判させるか、「蜂起による批判」を受けるかのどちらかであると強調した<sup>(29)</sup>。それは、農村コムニストにとっては厳しい試練であり、内戦を戦ったコムニストの名誉を傷つけることを憂慮するものは少なくなかった。

1924年12月末にはソ連中央執行委員会付属でソヴェト建設会議が設置され、地方ソヴェト機関の改革やソヴェト活発化のための本格的な活動を開始した。これを承けて翌年春からはソヴェト建設会議は各県でも開催され、転換をソヴェト組織に浸透させる役割を担った。党会議としては4月の第14回党協議会が、ソヴェトの会議としては5月の第3回ソ連ソヴェト大会がその頂点となった。同時に、農村における市場経済の発展を妨害する要因を取り除く様々な立法が出された。農民に対する不当な弾圧や収賄などの罪を負うコムニストは投獄された<sup>(30)</sup>。

最後に、1924年選挙を廃棄して1925年1月下旬～5月に実施された部分的再選挙は、多くの地方で党組織による介入を極小化した条件下でおこなわれた。地名は示されていないが、『プラウダ』紙に掲載されたコムニストの数カ月後の回顧は、再選挙の典型的な状況を示したものである。「農民ははじめて非常に真剣に村ソヴェト選挙に関わった。選挙には60%の有権者があらわれた。一方、細胞はこの選挙から何か脇におかれ、選挙は細胞を通り過ぎた。その結果、細胞の権威はますますひどくなっている<sup>(31)</sup>」。その結果はコムニストにとって惨めなものとなった。

村ソヴェト員全体に占めるコムニストとコムソモール員の割合は、1924年選挙時に比べておよそ半分になった（11.3%から5.9%へ）。より実態を反映している、村ソヴェト議長に占めるコムニストとコムソモール員の割合もおよそ半分になった（26.2%から14.8%へ）。郷ソヴェト大会が選出する郷執行委員会メンバーの場合においても、両者の割合は60.6%から42.3%へ大幅な減少を示した。そのなかのコムソモール員の減少はとくに顕著であり、比率は10分の1となった（38.5%から3.8%<sup>(32)</sup>へ）。

---

(28) Правда. 15 февраля 1925 г.; УЗ Свердловского юридического ин-та. 1959. Т.9. С. 48.

(А.А. Петерюхин) さらにモロトフ通達を参照（Беднота. 22 октября 1924 г.）。

(29) См.: Сталин И. Соч. Т. 7. М., 1947. С. 22, 31.

(30) 最後の点の詳細は、前掲「ネップと農村コムニスト」、6-7頁を参照。

(31) Еще не поняли. Из писем деревенских коммунистов // Правда. 5 июня 1925 г.

かつての農民反乱の「コムニストなきソヴェト」のスローガンは、このときなおも強い生命力をもっていた。この不穏な結果を非常に早い時期にむしろ肯定的に把握したのは、当時、中央委員会組織配員部の要職にあつて農村コムニストの動向を見守っていたメンデリ・ハタエーヴィチだけだったのであろう。再選挙の趨勢がほぼ明らかになった1925年3月頃、彼は、村ソヴェトでは、コムニストは前選挙の55%ないし60%（コムソモール員は半分以下）まで減少するだろうと予想し、しかしこのような減少によってわれわれが特別な不安に陥ってはならないと主張した。「なぜならば、農村に住むコムニスト全員のほとんど75%ないし80%が村ソヴェト員であつたというこれまでの異常さが、これによって取り除かれつつあるからである<sup>(33)</sup>」。これは、農村の指導者として不適格なコムニストが再選挙によって淘汰されつつあるという認識であつた。

#### 4. コムニストの「茫然自失」

『貧農』紙は、1925年春、多くの農民が意見をよせているのに、なぜコムニストは沈黙しているのか、と何度か語りかけた。このときコムニストを襲っていたのが農村活動への自信の喪失であつた。

ブハーリンは4月の第14回党協議会において、「新経済政策への移行に際してわれわれは党の危機を経験したが、今われわれは……党の危機を農村で経験しはじめています。わが党細胞が今のところ解体状況にあるがゆえに、この危機は進行しているのである<sup>(34)</sup>」とまさに発言した。

農村ではコムニストを排除しようとする意図が明白に存在した以上、コムニストの危機感は現実のものであつた。5月、ジノヴィエフは、再選挙の最中にアルタイ農村のコムニストが彼に送つてきた手紙について語つた。手紙には「明日10日、選挙があるので追伸します」とあつた。しかし、翌日、書いてきたのは別の人物であつた。再選挙でコムニストは1人も通らなかつたのである。彼らがどうすればよいのか、それは差し迫つた問題であつた。ジノヴィエフは、このときの危機を、ブハーリンと同様に、ネップへの移行時と比較して<sup>(35)</sup>いた。

1925年5月から8月までヴォローネジ県ノヴォホピョールスク郡を調査した党中央統制委員会メンバーのイ・ムルーゴフは、その内容を明らかにしている。

下部の活動家にとって、農村政策の新コースは全く予期しないものであつた。郡〔党〕協議会で発言した同志は、この転換を、農村コムニストの頭上に加えられた突然の一撃にたとえた。こ

---

(32) Избирательная кампания в Советы РСФСР в 1924–1925 гг. Предварительные итоги. Вып. 2. М., 1925. С. 26.

(33) Сельское хозяйство на путях восстановления. М., 1925. С. 782.

(34) 14-ая конференция РКП (б)…… С. 189.

(35) Правда. 27 мая 1925 г.

の予期せぬ政策の転換は下部組織の茫然自失を引きおこした。多くのコムニストは、新しい政策をクラークをめざす政策と見なし、新コースは党をソヴェトの指導から遠ざけるものだと理解した。<sup>(36)</sup>

多くのコムニストは方向を見失った。当時、もっとも広く用いられたのがこの「茫然自失」の語であり、これが当時の代表的な反応であった。それは、存在の基盤を喪失した感覚であり、「退廃的な気分」さえ引きおこされていた。<sup>(37)</sup>

モスクワ郡委員会の報告によれば、多くの地方の郷ソヴェト大会で自分たちが立てた郷執行委員会の候補を擁護することができなかつたばかりか、モジャイスク郡では、複数の党員が、これまでソヴェト権力や党、そして彼らが農民に対して犯した誤りについて「懺悔の演説」をした。<sup>(38)</sup>

他の反応もあった。下部のコムニストの断片的な発言、捉え方が数多く記録されている。「国内戦に参加した党員が情けを受けることもなく見捨てられている」。なぜ陣地を明け渡さなければならないのか。それは活動のポリシェヴィキ的なアプローチではない。非党員に明け渡すために闘い取つたのではない。「われわれはもう要らないということだ」。<sup>(39)</sup>1925年3月にトムスク郡委員会書記が県委員会書記に送った情報によれば、下部の党員の不満は、中央委員会がプロレタリア独裁を放棄したという非難にまでいたつていた。<sup>(40)</sup>革命が終わつたという理念的な失望が生まれたことは無視できない。

党中央に対する強い弾劾の例を同じシベリアの地方党委員会の資料から引用しよう。8月の調査によれば、一部のコムニストは「農村における命令と『指揮官の』ポストへの『権利を奪われた』ことに激昂して、党の方針を『クラーク的偏向』、『都市のコムニストの思いつき』、『一時的な策略』等々と非難している」。<sup>(41)</sup>

同じく広汎に存在した反応は、コムニストが変化を十分に理解しない、あるいは理解したがらないというものであった。1925年再選挙分析についての内務人民委員部の要請に応じて、全国の郡執行委員会がアンケート調査に答えたが、そこにはコムニストの新コースに対する態度について多く

---

(36) Розит Д. П. Проверка работы низового аппарата в деревне. М., 1926. С. 59.

(37) Известия Сибирского краевого комитета РКП (б). 1925. №4-5. С. 5.

(38) Сельсоветы и волисполкомы. Под ред. Я. Яковлева и М. Хатаевича. М.-Л., 1925. С. 34.

(39) На аграрном фронте. 1925. №5-6. С. 198, 200; Известия Сибирского краевого комитета РКП (б). 1925. №4-5. С. 5.

(40) Из истории земли Томской. 1925-1929. Народ и власть. Сборник документов и материалов. Томск, 2000. С. 34.

(41) Известия Сибирского краевого комитета РКП (б). 1925. №6-7 (сент.-окт.). С. 14. ただしこれは「一部のコムニスト」のものであるとされている。

の回答があった。一例だけをあげよう。ノヴォニコラエフスク（まもなくノヴォシビルスク）県カルガート郡の報告は、「若干のコムニストは、党が『農村に<sup>おもて</sup>面を向けよ』と『ソヴェト活発化』のローガンで設定した課題を全く理解しなかった」と断定した。<sup>(42)</sup>

あるいは、こうした人々は、新コースは「一般的な」原則を提示しているのであって、具体的な行動を今変える必要はないと自慰的な態度をとった。モスクワ県のように全郷で中央の方針が採用された模範的な地方についてさえ、エヌ・ア・ウグラーフは再選挙時の農村党組織の状態を次のように指摘している（5月、モスクワ委員会総会）。「最初、選挙にわれわれがアプローチしたとき、個々の党組織や党員グループはソヴェト活発化に関する党の決議を真剣に受けとめることをせず、それはたんに一般的な政策（*большая политика*）であるにすぎない、と考えた」。ウグラーフは、わが党組織は「不意に」党の新コースに直面して、再選挙までに「十分に明確に党の政策を理解できなかった」と認め<sup>(43)</sup>た。

農民コムニストの場合には、そのもっとも動揺しやすい部分が革命の展望を失って、狭隘な個人経営に閉じこもる危険が語<sup>(44)</sup>られた。

下部のコムニストといっても、「茫然自失」は細胞や郷どころか、しばしば郡委員会のレベルにまで及<sup>(45)</sup>んでいた。しかし、「茫然自失」は実質的には部分的に県をもとらえていたというべきであろう。なぜなら、ソ連中央執行委員会は、参加率が35%に達しなかったところで再選挙を実施すると規定したが、多くの県（アストラハン、キーエフ、ドネツクの諸県、バシキリヤ、白ロシアの諸県）の執行委員会は、35%をはるかに下回るパーセントでの参加率を再選挙の基準として採用することによって再選挙の必要な地域を狭く限定し、「被害」を小さくしようとしたからである。<sup>(46)</sup>

全体として、この複雑な状況は、数年後、スターリンの論文「成功による幻惑」によって引きおこされた1930年春のカオスと比較することができる。このとき、スターリンの論文は下部のコムニストによる集団化の「いきすぎ」を非難し、農民はこの論文が掲載された『プラウダ』を歓喜をもって迎えた。しかしコムニストは、実際、ここかしこでその新聞を読むことを農民に禁じたのである。

同様のことが1925年に起こった。サラートフ県の動員解除された赤軍兵士（コムニストであると見なしてよいであろう）の興味深い手紙を見ることができる。彼らは3人集まって新聞を定期購読することになり、それを一緒に読もうと集まった。そのとき「若干の農民が、われわれが新聞を受けとって読んでいると知って、それを聞こうとわれわれのところへやってきた」。ところがあるとき、

---

(42) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 295.

(43) Правда. 10 мая 1925 г.

(44) Правда. 7 апреля 1925 г. (Л. Рошаль)

(45) Большевик. 1925. №3-4. С. 85.

(46) Сельсоветы и волисполкомы. Сб. статей и материалов. М.-Л., 1925. С. 20.

(47) これについては、前掲『ヴォルガの革命』、197-242頁がもっとも詳しい。本稿63-64頁をも参照。

2人の党員が私を叱りつけた。「新聞〔の内容〕を聞くために、そんなに多く集まってはいけない。3人を越えて集まってはいけない」。その後、「われわれ〔コムニスト〕は閉じこもって、3人だけで読んでいる」。この出来事は新聞の購読に否定的な効果をもった。『プラウダ』を購読しようとした周囲の7人が、この話を聞いて購読を控えたからである。

「3人を越えて集まってはいけない」とは明らかに農民を意識した叱責であった。実際、赤軍帰還兵の訴えに対して、『プラウダ』はこれを「農民に対するパルシコフとマルキン〔2人の党員〕の粗野な態度」と規定した。<sup>(48)</sup>

1930年春との比較がこれにとどまらない、いっそう本質的なものであることをのちにわれわれは知ることになる。

秋を迎えても状況は改善しなかった。10月、リュコフはこの「茫然自失」の根の深さについて語った。「農村では、個々の活動家のなかでも、下部党組織全体のなかでも……党の最近の決定に対する不信が存在している。若干の下部活動家の頭は混乱し、政治の方向性を見失っており、新しい状況への適応能力がなく、『清算的な』気分があり、成長しつつある農民の活動性のあらゆる指導を拒んでいる」。<sup>(49)</sup>

この落胆には、コムニスト特有の思考の様式がともなっていた。彼らは、新コースによって「クラーク」の脅威が発生する危険を感じとった。当時シベリア地方党委員会書記であったエス・ヴェ・コシオールは、こう指摘した。「古い方法は……毎日の慣習のなかで血となり肉となっているので、それを拒否することは、農村の権力と影響力をすべて失って、それらをみずから富裕農とクラークに譲り渡してしまうように見える」。<sup>(50)</sup>と。

1925年6月5日の『プラウダ』紙に掲載された「まだ理解していない」と題された論文は、党の「クラーク」寄りの政策を非難する上のような考え方を批判した。地方から寄せられたコムニストの手紙を分析しながら、『プラウダ』論文は1つの結論を導いた。「本質的には、わが農村細胞は『クラークの危険』にではなく、農民層の増大する活発さに直面して途方に暮れたのである」。この論文は、党の新しい政策に対して様子見をし、協力をしない（ときには「知ったことではない」と公言する）ことを「反党的気分」と弾劾した。

この論文の重要性の1つは、問題を「クラーク」という階級ではなく、「農民」という無階級的な概念を用いて説明したところにある。ところが、のちに見るように、スターリンは再選挙の敗北の原因をクラークと、クラークに味方をした中農に求めたのである。論文の執筆者は、みずからの説明がスターリンのそれ（後述65頁）から逸脱していることに気がついていなかった\*。

---

(48) «Больше трех не собираться» // Правда. 12 мая 1925 г.

(49) На аграрном фронте. 1925. №10. С. 9.

(50) Известия Сибирского краевого комитета РКП (б). 1925. №4-5 (июль-авг.). С. 5.

\*この関連を突きつめると、ポリシェヴィキの歴史・現実把握では、「農民」という言葉さえ究極的には存在してはならないことに気づくであろう。それが実際にソ連史で起こった。1929-30年頃から文献から「農民」(крестьяне)や「農民層」(крестьянство)という語が消えはじめ、「クラーク」「中農」「貧農」等々の階級概念と、「コルホーズ員」と、その対立概念としての「個人農」の語が使われるようになった。ところが1933年5月のスターリン、モロトフの秘密指令において、「クラーク」の語が斥けられて、突如として「農民」という語が復活した。それまでの弾圧が階級とは無差別におこなわれたことが両者の念頭におかれているのである。<sup>(51)</sup>

論文は事態の本質に迫ろうとしている。「農村の活動家は、この活発さに合わせるができないと怖がっている。農民大衆の真の指導者になる能力がないと怖がっている。ここからパニックが起こっている」。「農民には、豊かなものだけが賢く、貧しいものは阿呆である、という観念がある」。「わが農村の同志たちの大きな茫然自失は、『富める利口者と貧しい阿呆』(«богатый умник и бедный дурак»)という説得力のない考え方を口実にしている」。ここに窺えるのは、党の階級観を農民が打ち負かそうとしていると彼らコムニストは自信を失っており、彼らの状況が「事実上、党の政策への独特の『受動的抵抗』」にほかならないことである。地方のコムニストは党中央と農民とのあいだで挟み撃ちの状況にあった。

## 5. コムニストの職について

『ブラウダ』に送られた或るコムニストの手紙には注目すべき一節があった。「党が村ソヴェト選挙に際してより大きな民主主義を要求したからよけいに、何か茫然自失のようなものが感じられた。この政策には何か不健全なものがあり、それは早晩なくなるだろう、現実にはふたたび旧態に復するだろうと考えられた<sup>(52)</sup>」。こうしてコムニストは選出制(выборность)の導入を「民主主義」と呼んだ。コムニストが農村で人気がなく、農民は独自の価値基準で代表者を選ぼうとしているときに、1925年の再選挙のように「民主主義」を導入して農民に対するたがを緩めたために、それは農村コムニストの立場を揺るがせ、彼らから有給の職を奪いとった、とコムニストは見なした。ハタエーヴィチが語ったコムニストの「保守性」の内容に関わる第3点(前述51頁)とはこの職の問題である。

ハタエーヴィチの分析によれば、不安と不満に陥ったコムニストは、農業との関係を断ち切った、すなわち脱農民化の過程をたどった人々であった。「農業に従事せず、様々な行政職で働き、給与によってだけ暮らしていたコムニストにおいて落胆的な気分がもっとも激しい。彼らは、完全に調子が狂った状態になり、今後どんな仕事で使われるのか知らないでいる。しばしば農民のあいだでいかなる権威もないこれらの同志は、新コースとの関連で自分の出口を全く見いだせない。彼らはこ

(51) 前掲『ヴォルガの革命』、573-574頁を参照。

(52) Еще не поняли. Из писем деревенских коммунистов // Правда. 5 июня 1925 г.



うっている、『以前の時期の後、今、権威を手に入れることは不可能である』と<sup>(53)</sup>。]

地方レベルでは、1925年3月のクバン管区党委員会の文書のなかで、「茫然自失」と職との関連が明瞭に語られている。ここでは再選挙によって新たに登場したのは、それまでソヴェト建設から排除されていたコサックであった<sup>(54)</sup>（後述 67-68 頁をも参照）。コムニストは勝利に酔うコサックの対極におかれていた。敗北の心理を描写して文書は次のように総括した。「選挙結果への不満の主要な原因の1つは細胞メンバーのなかで行政職を失ったものが多いということだと、選挙後を支配する空気は明らかにした。この『過去の人々』が、村細胞の平の党員のなかで、陰鬱とパニックを広めている。今回ソヴェト員に再選されなかった『失業した』党員は自分の行政職以外に何をしたらよいか全くわからず、管区〔執行委員会〕へ行って、職を乞い、貧困などをかこっている<sup>(55)</sup>」。

1920年代の農村においては職の分化はまだ著しく未発達であった。農村の有給の職は、行政的なそれか、レーニン主義の嫡子としての協同組合の管理部門しかなかった。これらはほとんど郷、すなわち郷の中心地としての郷村に集中していた。それより下の村のレベルには、おそらくそのようなポストは稀であり、ここでは村ソヴェト（もしそれがその村に位置していれば、という条件つきであるが）の議長などわずかしかなかったであろう。このように、そうでなくても少ないポストがコムニストによって独占されることになった。当時、「コムニストになって勤める」（«служить в коммунистах»）という言葉が盛んに用いられた。これは、農村のコムニストが必ず有給の職をもった、「靴」をもった人間として登場したことを反映している。この職は、農業から離れ、脱農民化する傾向の先頭に立っていたコムニストにとって生存と権力の源泉であった。職を手に入れたコムニストは本質的に「保守的」であった。

なおジノヴィエフは、前出の報告（前述 55 頁）のなかで通信員（地方名不明）の手紙を紹介している。「われわれは今、彼ら〔失職したコムニスト〕を課税機関に入れた。税を徴収させれば、評判を得られるだろう」。徴税の暴力的な活動は農民の強い怨嗟の的であり、後半は全く信じ難い説明である。しかしこれは、徴税機関が、1925年再選挙で職を失ったコムニストにポストを提供したことを示した珍しい一例として注目される<sup>(56)</sup>。

逆に、農民の側に立つ人々は、この職と選挙の関係を見抜いていた。タンボフ県リーベツク郡の1村における再選挙前集会で、全権は、農民を前にして、前選挙の参加率が低かったことが再選挙の原因であると説明した。そのあと、旧郵便局長が演説に立った。彼は、全権の説明は二義的なもので、本質は別のところにあると述べた。「コムニストは革命の最初の日にあったままで今もいる。彼らは、居心地のいいポストにありついて、それをどうしても放したがらない」。選挙となると、コ

(53) На аграрном фронте. 1925. №5-6. С. 200.

(54) 詳細は、前掲「……社会政治的構造（2・完）」、77-79 頁を参照。

(55) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 224.

(56) Правда. 27 мая 1925 г.

ムニストはペコペコしはじめ、ご機嫌を取ろうとしている。彼らに対しては、「国は崩壊した。大衆は、とくに農民は零落した。誰がこんな状態に追い込んだのか」とはっきりといわなければならない、等々と長大な見事な演説をおこなった。<sup>(57)</sup>

コムニストが農村で選出的なポストを維持するためには、選出制そのものに対する否定的な態度に傾かざるをえなかった。ハタエーヴィチは次のように指摘した。「農村コムニストのなかには、個人的に首になることのない農村の指導者であることに慣れてきたため、大衆に依拠しているという考えに我慢することができず、『お互いに平等なものとして』大衆にアプローチすることができず、ソヴェトでは非党員農民が働くことになるということに耐えられず、コムニストである彼らが突然ソヴェト員でも議長でもないということがどういうことか理解できないものがある<sup>(58)</sup>」。彼らは、「民主主義」は自分たちを滅ぼすと直感的に理解していたのである。

農業を糧としている、はるかに少数のコムニストは、当時の変化の影響を受けることは少なかったとはいえ、彼らは農村の貧農と同様に、政治的、経済的状况に通じておらず、非党員の農民アクチーフよりはるかにこの点で劣っていた<sup>(59)</sup>。しかし彼らもまた、農業を離れて有給の職を求め、都市を志向していた点では、上に見た人々と同じであった。農村で職を失ったコムニストが、たとえ農業経営に従事していても、そこへ戻ることを「失業」と見なしたことは、きわめて重要な社会的現象である<sup>(60)</sup>。

農村で選出制が実現されれば、職の観点から見てコムニストと競合関係に立つのが、農業的に成功した農民であった。狭い農村社会では、農民は、隣人がもっているにわたりの数だけではなく、そのひなの数まで知っていた。富裕な農家があれば、その経営主がどのようにして財をなしたか、自分の労働でか、他人の労働でか、闇の稼ぎによってかを村の農民は誰もがよく知っていた。そのなかで、農民の尊敬を集めていたのは、自分の労働で経営方法を改良させることによって富裕になった農民であり、彼らが、「ムジークが呼ぶところの『勤勉な経営主』(«старательные хозяева»)<sup>(61)</sup>」であった。

彼らは概念的には「強い中農」や「富裕農」としてあらわれた。先進的な農民であり、読み書きができ、しばしば協同組合にも加入していた。彼らに対する農村コムニストの潜在的な恐れは、労働者党の独裁という条件のもとでは容易に彼らへの攻撃性に転化した。したがって、コムニストは彼をクラーク、敵と見なすことが稀ではなかった。実際、1925年1月～2月のヴォロネジ県における調査では、多くの農村コムニストのなかに「すべての勤勉な農民はソヴェト権力の敵である」と

---

(57) «Совершенно секретно». Т.3. Ч. 1. С. 154.

(58) Сельсоветы и волисполкомы. Сб. статей и материалов. М.-Л., 1925. С. 27.

(59) См. Большевик. 1925. № 3-4. С. 80.

(60) 奥田央「犁から鞆へ」野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』、2012年、203頁。

(61) Халецкий А. и Жигалин Г. Оживление советов и задачи комсомола. М., 1925. С. 29.

いう確信が根づいていた。<sup>(62)</sup>それは、村の農民を引きつけている彼の権威のゆえであった。

1925年に明確な形をとってあらわれた、カリーニンとスミルノフの「勤勉な農民」「強い勤労的な農民」の思想\*——やや遅れてブハーリンもこの立場で登場した——は農村コムニストと基本的に相容れなかったことを確認しておこう。この点では、われわれは、第14回党大会（1925年10月）における党中央（スターリンやコシオールら）と立場は同じである。コシオールはブハーリンについて語った。「ブハーリンの有名な『豊かになれ』は、地方における正しい路線〔?——筆者〕には、いかなる程度においても、全く影響を与えなかった」。「今、管区や県の協議会で農村活動の総括をおこなったときに、ほとんどいたるところで耳にしたことは、いわゆるクラーク的の偏向は主に上から、文筆家やインテリ上層のなかであらわれていることであり、それが党の政策や生活に何の影響も与えていないということである」<sup>(63)</sup>。

\*カリーニンは当時、勤労によって豊かになった農民をクラークと見なしてはならないと主張していた。<sup>(64)</sup>

農村コムニストが新コースに転換しようとしなない「保守性」については、職という重要な問題以外に、もう一点、論じなければならないことがある。それはコムニストの文化的水準の低さである。

古い思考様式が底流に生きつづけることを促進していたのは、農村コムニストのいわゆる「政治的文盲」であった。彼らの多くは、共産党の歴史や政治の基礎的な知識、素養が欠けていた。そこには彼らが新聞を読まないという事実も作用していた。この事実は、当時いたるところで語られ、調査で明らかにされ、懸念され、先進的な農民はそれに呆れた。もっとも深刻なことは、それが、党の現在の、新しい考え方への無理解の重要な原因となったことである。

コムニストが新聞を読まないと指摘した『プラウダ』紙の記事は、地方の活動家が、カリーニンの階層分化に関する議論を知らず、「すべての富裕な農民を誰も彼もクラークであるといっしょくたにしている」と農民が語っていると指摘した。その他の指導者の考えも、したがって重要な党の現在の政策も「多くのコムニストは何も知らない」。コムニストは、強い経営をクラークと呼んではいけないというのは「全部クラークの扇動」であり「無駄話」であるという。それで話し合いは終わってしまう。「農村の集会では、ときに手に新聞をもった非党員の農民が地元の党活動家を『罵り』、他方、活動家はぼかんと聞いているだけでどういったらよいのか分からないというのは驚くべきこと

---

(62) Никулин В. В. «Новый курс» в деревне: замысел и реальность // Крестьяне и власть. Материалы конференции. М.-Тамбов, 1996. С. 161.

(63) XIV съезд ВКП (б). Стен. отчет. М.-Л., 1926. С. 311–312.

(64) 詳細は、奥田央「『クラーク』と『勤勉な農民』」（『ロシア史研究』ロシア史研究会、第100号、2017年）11–14頁を参照。さらにスターリンは早くからこの考え方と対立していた（1924年4月に中央委員会総会でカリーニンがふと洩らした発言を参照。カリーニンはこの部分を最終的な速記録では削除した。РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 127. Л. 136–137）。

ではない<sup>(65)</sup>」。

1925年ノヴォニコラエフスク県カインスク郡の2地区の調査結果によれば、調査された141人の党員のうち、「きちんと」読み書きができるのは30名にすぎず、「残りの全員が完全に文盲である」。それは「技術的文盲」といわれた\*。政治的文盲はいっそうひどい状況にあり、ポリシェヴィキ党の歴史と課題についてもっとも初歩的にでも知っていたのは19名だけであり、残りの全員が完全に無知であった。ネップと革命の初期との相違は、コムニストは今やライフルをもたずに歩き、粗野なところを少なくし、食糧徴発をしないことにすぎなかった。「農民同盟」について、9割の党員はそれが何かを知らず、それは農民に有益であり必要である、等々と答えた。さらに、「富裕に暮らしているコムニスト、勤勉なムジークのことを、細胞のメンバーはほとんどクラークと見なしていた」。カインスク郡委員会の<sup>インストラクトル</sup>指導監督官でさえ、弱体な経営をどのようにして助けるのかという調査委員会の問いに対して「クラークから余剰を没収し、貧農に与えなければならない。これは国家にも役立ち、国家は貧農に資金を与えることがなくなるだろう」と答えた。<sup>(66)</sup>

\*シベリア地方委員会組織指導部長ア・レーパは「農村コムニストの技術的文盲、半文盲は日常的な現象である」と述べた。<sup>(67)</sup>

農村コムニストの低い文化的水準は、「クラーク」をつねに敵として設定する意識を維持させ、戦時共産主義とネップとの連続性を保持する要因として作用していた。

## 6. 「1925年」の回顧と分析

「党の危機」を引きおこした「1925年」は、下部のコムニスト以外ではどのように認識されていたのであろうか。また「1925年」の現実過程は何であったか。

われわれは、さきにこの状況を、1930年春のカオスと比較できると指摘した。しかしそれはたんなる比喩にとどまるものではない。「1925年」は、のち全面的集団化に際して、過去の記憶として、農民のなかにも、観察者のなかにも蘇った。その内容は、農民にとって「1925年」がどのような意味をもっていたかを明らかにしている。集団化の強行に激しく抗議する農民が誰よりもまずその年を思い出した。以下は、1930年3月の中央黒土州コズロフ管区の農村を描いたものである。

農民の行動は、ナバート〔教会の鐘楼の鐘を一斉に鳴らすこと〕と、通りでの大衆集会からはじまった。そのあと、農民は、コルホーズから家畜を解放した。そのなかにはクラークから没収

---

(65) Правда. 14 марта 1925 г. (П. Козлов)

(66) Правда. 5 марта 1925 г. (С. Бергавинов)

(67) Известия Сибирского краевого комитета РКП (б). 1925. № 3. С. 10.

された家畜もふくまれていた。スターロ・クリヨンスコエ村、マールイ・スネジェートク村、ノヴォポリャーノヴォ村では村ソヴェトと、文化クラブ室〔文化啓蒙、政治活動のための部屋〕が破壊された。村ソヴェト員と地区執行委員会の全権が殴打された。特徴的だったのは、農民のスローガンが「ソヴェト権力方歳」(あちこちで「1925年の」が加えられていた)、「暴力反対、コルホーズ反対」だったことである。農民は、熊手、シャベル、猟銃で武装していた。

これは、全面的集団化の開始期に各地で多発した真の「暴動」の一例である。警察との銃撃戦と赤軍との戦闘が起こり、多数の死傷者が出た。<sup>(68)</sup>

もう1つの資料を掲げよう。同じ1930年4月、同州委員会書記ペ・ペリネンは、農民のこのような行動によって大半のコルホーズが崩壊したモルドヴィヤ州の農村に直面した。彼は、サマラ市でのヴォルガ中流地方委員会ビュローの席上、その状況を報告しながら突然、数年前を思い出した。

村ソヴェトと土地団体〔共同体〕の権利についての問題を今、きちんと立てる必要がある。

多くの場合、土地団体は、〔現在〕それに対して与えられていないが、ソヴェトの装置の強化以前に1924-25年にもっていた権利を、略奪的に奪い取った。<sup>(69)</sup>

ここでは、コルホーズが崩壊して農民共同体が復活している状況を州書記が眼前にしなが、<sup>(70)</sup>「1924-25年」に共同体が村ソヴェトの地域的統治の機能を蚕食したことを思い出しているのである。いっそう研究的な観察は、その事実を、集団化以前の農村において確認した。それがあてはまるのがやはり1925年であった。「1925年に、スホードによる村ソヴェトのほとんど完全な吸収が認められた」。これはこのとき農民の自治が急激に拡大し、共同体は村ソヴェトをその一部分に取り込んだことを意味している。村ソヴェトと土地団体との関係を調査していた労農監督人民委員部の職員であったエム・レズーノフにとって、調査した地方の状況は憂慮と警戒の念を引きおこすものであった。

しかしレズーノフとは異なった視角で、国家が、地方自治の形成という点で、農民の動きと軌を一にしていたという認識を示すものがいた。内務人民委員代理のエム・ボルドイレフがそれである。彼によれば、「1924年の最後の時期と1925年の大部分」は、「地方自治の原則の真の、現実的な定式化がなされたとき」であった。<sup>(71)</sup>本節で例示したすべての事実や議論は、この地方自治という概念で総括的に理解できるであろう。<sup>(72)</sup>

---

(68) *Ляпина Т.А.* Начало раскулачивания на Тамбовщине // *Общественно-политическая жизнь Российской провинции. XX век.* Тамбов, 1993. С. 77.

(69) *О политическом положении в деревне и ходе сева.* Самара, 1930. С. 27-28.

(70) *М. Резунов.* Сельские советы и земельные общества. М., 1928. С. 49.

(71) *Болдырев М. Ф.* Оживление советов. М.-Л., 1926. С. 17.

## 7. 「茫然自失」の克服

これまで見たように、1924年10月総会の決議にある「積極的な非党員農民」のソヴェトへの登用という規定や、1925年春の「勤勉な農民」への高い評価、コムニストが怖れたのは「クラーク」ではなく「農民層」の活発さであるという認識など、「1925年」には、農民に対する非階級的な、あるいは無階級的なアプローチが著しい特徴を構成している。それは、「農村に面を向けよ」のスローガン以来の特徴であるといってもよい。下部のコムニストが狼狽したのは、階級的な（敵味方の）観点が突然消失したからであった。

この点で、スターリンはボリシェヴィキの伝統的な観点に戻るうえで大きな役割を果たした。スターリンは、前年10月総会で、「新コース」を「上から」遂行することにさえ言及したが、まもなくそれがいきすぎたことを警戒し、引き締めることを忘れなかった。スターリンは、1925年1月、「新しい時代、農民の時代が来た」という人々からきっぱりとみずからを区別した。<sup>(73)</sup>

1925年の再選挙の結果が明らかになって以降のスターリンは警戒を明確に強めはじめた。彼は、5月、再選挙が「中農が貧農に対抗してクラークの側に立っているという疑う余地のない事実」を明らかにしたと危機感をあらわにした。<sup>(74)</sup> スターリンの議論には「階級」が明確であり、敵味方を設定しようとする姿勢は農村コムニストにはわかりやすかったであろう。

3月に多くの地方で再選挙が終わると、オ・ゲ・ペ・ウは、それを総括した報告書を作成した。それによれば、いたるところで、コムニストのソヴェトへの選出に反対する強力な闘争が展開しており、「クラーク層とソヴェト権力に敵対的な農村の層の反ソ的な活動」が増大したと評価した。再選挙の結果、新しいソヴェトの著しい部分がクラークによって汚染されており、あちこちで「エス・エル、旧匪賊、白軍など」が入り込んでいた。この場合、「旧匪賊」とは、農民革命期の暴動の参加者をさしており、実際、タンボフ県、ヴォローネジ県、ウクライナ、シベリアなどでは、かつての積極的な農民運動の参加者が再選挙でソヴェトに選出された。<sup>(75)</sup>

オ・ゲ・ペ・ウは反党的、反ソ的な「ありとあらゆる挑発的なうわさが全連邦にひろがっていること」を確認した。コムニスト活動家らへの殴打や脅迫、集会における「武装蜂起への直接的アピール」があった。「憲法制定会議、直接・平等・秘密選挙、言論・集会などの自由、ソヴェト権力の転

---

(72) なお、1920年代の農民自身が自治の拡大を要求したと筆者が見なした、同時期の多くの事例について、前掲「……社会政治的構造(1)」、26-30頁を見よ。当時の農民の自治についてはその限界も論じる必要があるが、それは本稿の枠を越えている。本稿注5)の論考で考察する予定である。

(73) Сталин И. В. Соч. Т.7. С.25.

(74) Там же. С.123.

(75) «Совершенно секретно». Т.3. Ч. 1. С.181-183.

覆」の要求も見られた。クバンではコサックによるコムニストの殺害が起こった。集会における「武装蜂起への直接的アピール」があった。<sup>(76)</sup>

農民の政治的活発化に対して殺人にいたる「報復テロル」がコムニストの側からなされた。1925年6月には、シベリアからそれが伝えられた。彼らの大半は明確に新コースに対して反対の立場をとっていると断定が加えられた。「そればかりでなく戦時共産主義期の旧習が大きな力をもっている」。コムニストによる富裕農に対する「懲罰」が多数発生した。スイチョフカ地区委員会書記（消費協同組合議長）は、ある農民を「強烈な反革命者」として殺害し、細胞の集会は彼を「反革命者を懲罰したもの」として擁護すると決定した。別の村では、1921年の農民暴動において父と兄弟を殺したとして、ある農民をコムニストが殺害した。<sup>(77)</sup>

シベリア地方委員会はこのような情勢を党員の「バルチザンの気分」の残存であると特徴づけた。<sup>(78)</sup>

逆に、トムスク県の1村ではコムソモール員が農民によって殺害され、その死体が焼かれた。コムニストとコムソモール員に対する農民のこのような多くの暴挙を調査すると、コムニストとコムソモール員の恣意的な家宅搜索、密造酒の没収などの「完全極まりない専横」が明らかとなった。<sup>(79)</sup>

オ・ゲ・ペ・ウはこれらの政治的緊張の背景として農民の厳しい経済的状况にも言及した。それは、昨1924年の旱魃の影響が強くあらわれはじめていた地方においてとくにそうであった。一連の地方で飢饉の兆候が明瞭に強くあらわれていた。1925年の冬から翌年春にかけてオ・ゲ・ペ・ウの報告書は、中央黒土地帯（とくにタンボフ県とヴォローネジ県）とヴォルガ下流地方（サラトフ、ツァリーツィン、ドイツ人自治共和国）やその他の諸県で中農を含む多くの農民が代用食（様々な混ぜ物、油の搾りかす、植物、さらには有害な物質まで）へ移行したこと、口にするものが全くない人々がいること、飢餓から浮腫のあらわれた人々がいること等々、悲惨な情勢を克明に伝えた。<sup>(80)</sup>

スターリンは、1925年6月9日の演説で、「中農がクラークの側についた」という「争う余地のない事実」をくりかえし強調するとともに、この状況を背景にして、クバン、シベリア、ウクライナで「反ソ的扇動」が強化されていると語った。このときスターリンは、農民への譲歩を権力の弱体さと理解して「さらに圧力を加えろ！」とする「白衛兵的分子のアピール」に言及し、「彼らをずっと待ちこがれている監獄のことを思い出させる」必要があると強い調子で書いた。スターリンによれば、新コースは、「反ソの分子との決定的な闘争を前提として」いた。<sup>(81)</sup>

1925年に失った地歩を取り返そうとする動きはすでにはじまっていた。モロトフは、このころ中

(76) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 68. Д. 149. Л. 29–33.

(77) «Совершенно секретно». Т.3. Ч. 1. С. 364.

(78) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 32. Д. 73. Л. 45.

(79) «Совершенно секретно». Т.3. Ч. 1. С. 364–365.

(80) «Совершенно секретно». Т.3. Ч. 1. С. 122, 189, 233, 303–304, 350–355, 363–364. 前掲「……ソヴェト農村のコムニスト」, 27–28, 44–45頁を参照。

(81) Сталин И. В. Соч. Т.7. С. 190–192.

中央委員会農村活動部での「3カ月の活動」<sup>(82)</sup>のあと、中央委員会10月(1925年)総会において、農村の社会的上層を「活発化」させたゆえに失ったものを取り返すという意図を表明し、次のような別のスローガンを打ち出した。農村の貧農を組織し、中農の先頭に立ち、こうしてクラークを孤立させるというスローガンがそれである<sup>(84)</sup>。貧農グループの組織化、選挙キャンペーンにおける貧農集会の開催という新しい課題は、1918年の「貧農委員会」とは原則的に区別されたが、それでも階級的な原則、ボリシェヴィキの教義への回帰という側面を強くもっていた<sup>(85)</sup>。まもなく12月の第14回党大会においてスターリンは「ネップの拡大」に反対であることを公言した<sup>(86)</sup>。

「1925年」のプロセスに対するこのような逆方向のベクトルは、新コース下に潜在していた下部党員の古い考え方に呼応していた。「茫然自失」のなかにあったコムニストは、新コースが長くはつづかず、もとの状況に戻るだろうと考えていた。そのため、多くのコムニストに動揺と自信喪失が起こっているにもかかわらず、他方で命令的方法は簡単には消えなかった。1925年の再選挙に際して1924年選挙期と同様の、農民に対する「押しつけ」が部分的に維持され発生したことはいくつかの報道が伝えている。一例をあげよう。

トムスク県プロコピエフスク地区チェルカソヴォ村では、村ソヴェト選挙前集会において非党員農民が地方活動家を非難した。これに対して2名の党員が「クラークと反革命者の暴動がこの村で準備されている」と宣告した。選挙では、ある労働者を殺害したことで裁判にかけられている党員が農民によって拒否されたが、集会議長(地区委員会書記であった)は彼をふたたび候補に立てた。しかし、農民はそれをまたもや拒否した。同地区のソヴェト大会では、選挙結果に恣意的な変更が加えられた。大会の国際・国内情勢に関する報告にもとづく討論では全参加者に発言が禁じられた。地区委員会書記は、「大会では、言論と出版の自由は許されない」と公言した。記事の執筆者は、「こんな風にして党員は、ソヴェトを『殺す』活動をしているのである」と末尾に記した<sup>(87)</sup>。

コムニストの激的な「政治的気分」を北カフカーズのクバン管区委員会が伝えた。以下は、1925年の再選挙によって党の候補が多く落選した状況を描いた3月の文書である。

300人ほど集まった赤軍の復員兵のある集会において、1人の赤軍兵士が発言に立ち、管区委員会全権に全く真剣にこう提案する。「1人の赤軍兵士に対して20人のコサックのクラークを殺

(82) Там же. С. 332–333.

(83) 奥田央「犁から鞆へ」野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』、2012年、194–195、199頁。

(84) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 197. Л. 57 об.

(85) ただし、この階級的原則は1925/26年選挙キャンペーンではほとんど実現されなかった。同選挙キャンペーンについて筆者はまだ詳しい論考を著していない。

(86) Сталин И.В. Соч. Т.7. С. 357.

(87) Правда. 20 мая 1925 г. (М. Гринченко)



せと指示をくれ、一晩でこの反革命者を全員殺してみせる。この指示がなくても、どちらにせよ少しずつ彼らを殺すだろう……」と。そしてそれは集会から支持をもって迎えられた。……選挙があって貧農の敗北に終わったすべての<sup>スタニーツァ</sup>村において、貧農の同様の雰囲気がある。<sup>(88)</sup>……

最後の「貧農」は勿論「コムニスト」と読まなければならない。1925年12月の第14回党大会において、スターリンは、まるでこの文書を読んだかのように、「茫然自失」の裏に隠されたコムニストのクラーク清算への強い傾向を指摘した。

党はどちらをより多くやろうとしているか、クラークから身ぐるみ剥ぐことか、それともそうしないで、中農との同盟に進むことか、という質問をコムニストに出すならば、私は100人のコムニストのうち99人までが、党は、クラークを撃てというスローガンに対して、もっとも多く準備ができていると答えるだろうと思う。ちょっとやらせてみたまえ、そうすれば、一瞬にしてクラークを丸裸にするだろう。<sup>(89)</sup>

これは、右への偏向と左への偏向のうちで、後者の偏向として警告されたものである。コシオールは、「この偏向は下から来るものであり、戦時共産主義の残滓のうえて育てられたわが農村党組織に根をもっている<sup>(90)</sup>」と規定した。スターリンは、そればかりでなく、党の系列で上から下ろされる「攻撃信号」があれば、末端で一挙に、大規模に呼応する勢力が存在することを明確に自覚していた。それはまことに印象的な発言であった。これをのちに人々が思い出すことをわれわれは論文の最後で見ることになる。

1926年3月15日、スターリンは党中央委員会組織局の会議において、1925年10月13日付の全ロシア中央執行委員会の選挙訓令を激しく非難した。訓令は、憲法が選挙権を容認していない分子にまでそれを与えた、というのがその理由であった。それを受けて中央委員会には、選挙権をもつ人々の範囲を著しく狭めた新しい訓令を作成するための特別な委員会がモロトフを議長として設置された。<sup>(91)</sup>

新しい選挙訓令の精神は、モロトフの報告にもとづく1926年7月の中央委員会・中央統制委員会合同総会の決議において示された。それは、国家機構の基礎がプロレタリアと極貧農・半プロレタリアにあるという党綱領の原則から出発した。決議は、ソヴェト活発化の目的とは「ブルジョア

---

(88) ГАРФ. Ф. Р-393. Оп. 1а. Д. 95. Л. 223-223 об.

(89) Сталин И. Сочинения. Т. 7. С. 337.

(90) XIV съезд ВКП (б). Стен. отчет. М.-Л., 1926. С. 312.

(91) 詳細は、前掲『『クラーク』と『勤勉な農民』』、15-22頁。

分子の最終的な政治的孤立化」であると宣言し、前 1925/26 年選挙キャンペーンにおいては、訓令の「拡大解釈」によって多くの階級的異分子を容れた、「この誤りをいっそう決定的に強調する必要がある」と問題点を具体化した。こうして選挙キャンペーンにおける活動の実践的課題が選挙権剥奪の強化にあることが明確となった。階級的な観点が決議全体を埋めていた。新しい選挙訓令は、憲法と党路線に厳密に相応していなければならない。来るべき選挙によって村ソヴェトに選出される非党員農民アクチーフは、何よりもまず貧農とバトラークでなければならなかった。<sup>(92)</sup>

1926 年 3 月に発足した委員会が作成に従事していた新しい選挙訓令は、9 月に連邦向け、11 月にはロシア共和国向けとして公表された。

中央委員会 7 月総会の決議は、ソヴェトの活動における非党員農民の役割を重視する「ソヴェト活発化」の政策が実質的に意味を失ったことを示していた。なぜなら非党員農民の中核が中農であることはこれまでのすべての議論において、あるいは教義とされたレーニンの言葉からも、1925 年の段階では疑いを挟まれることはなかったからである。「ソヴェト活発化」が終わるところ、階級的基本原则が選挙権剥奪という現実に直接適用される場所に、コムニストはふたたび活動の空間を保証されることになった。

モロトフは、1927 年 1 月 27 日の報告のなかで、これまでの選挙キャンペーンでは、選挙権者を不当に拡大したという多くの誤りを犯し、連邦平均で 3~4% のクラークがいるのに、農村では 1% しか選挙権を剥奪しなかった。したがって、「選挙権剥奪は今年の再選挙キャンペーンでは多くなるだろう」と述べて、3~4% が目標であることを示唆した。さらに、特別にクラーク的な地方という例外的なケースであると断りながら、そこでの剥奪の割合は 5~7% にまで高めうるし、「高めなければならない」と前年に比べて急激な転換が起こりうることも示唆した。<sup>(93)</sup> モロトフの最後の報告は、選挙権剥奪の現状に対する批判をふくんでおらず、進行中の選挙権剥奪の過程を反映し、かつ促進した。中央の諸新聞には、村の半数に、さらには村の全体にまで選挙権の剥奪を適用した例が報じられた。

この急激な攻勢の説明において、キセリョーフは「若干の地方の党機関とソヴェト機関の指導者が政治的な嗅覚と見通しを喪失した」と評した。<sup>(94)</sup> しかし、もっと現場に近い資料はこの「嗅覚」を別の意味で用いた。シベリア地方労農監督人民委員部の文書は、選挙権喪失者 (лишенцы) のリストを作成するときに、訓令が要求した文書による裏付けなしに、「地元の活動家の意見にしたがって」「階級的な嗅覚にもとづいて」選挙権を奪った、と指摘した。<sup>(95)</sup> 1927 年 3 月 1 日現在の選挙キャンペーンを報告したオ・ゲ・ペ・ウの情報摘要は、「大半の誤りは、選挙訓令、とくに、去年選挙権

(92) КПСС в резолюциях. 9-ое изд. Т.4. М., 1984. С. 38, 39, 43-44, 45-46.

(93) Молотов В.М. Выборы в советы и задачи рабочего класса. Л., 1927. С. 14.

(94) Правда. 5 февраля 1927 г.

(95) ГАРФ. Ф. А-406. Оп. 11. Д. 959. Л. 7.

を奪われなかった新しいカテゴリーの人々から選挙権を剥奪することに関して選挙委員会が理解する力をもっておらず、若干の選挙委員会が選挙権喪失者の数を去年に対して何が何でも増加させようとした傾向があったために起こった」と指摘した。<sup>(96)</sup>

いいかえれば、コムニストは、選挙権剥奪に際して誰かを誤ってその対象としてはならないという、それまでの慎重な態度から、1927年選挙キャンペーンにおいては、コムニストは誰かをその対象として把握し損なってはならないという攻撃的な態度へと転換した。新たな態度は、疑わしいものはまずその対象に含めるということであり、「し足りないよりも、しすぎる方がよい」というきわめて特徴的な態度であった。この態度はその後の選挙キャンペーンにおいても維持され、集団化へ流れ込むことになる。

1927年2月中央委員会総会において、シベリア地方執行委員会議長ロベルト・エイヘは、次のように語った。

〔カメンカ管区の6地区では〕昨年201件の選挙権剥奪があり、今年は2756件であった。これは、勿論、健全ではなく危険な現象である。この例によって、第14回党大会において同志スターリンの言葉が完全的に的中したのだと私は思う。そのことでジノヴィエフは中央委員会のある総会で同志スターリンに敵対したのであった。同志スターリンはあのとき「ちょっとやらせてみたまえ、一瞬で、クラークは〔コムニストによって〕丸裸にされるだろう」といった。下部の活動家は、〔1926年12月の〕訓令を理解しなかったか、あるいは、クラークを清算しよう、クラークを迫害しようという風に訓令を理解したいと思ったのである。<sup>(97)</sup>

同じ頃、中央委員会の機関誌『農村コムニスト』に掲載された一論文は、エイヘと同じ視角で詳しく論じた一論を掲載した。しかしそこでは、「コムニスト」と書くべき部分が「貧農」と記されていた。これは、先のクバン管区委員会の文書におけると同様である。そこで次の主張が理解できるであろう。「現在進行中の選挙権剥奪の現状は、上掲の〔スターリンの〕引用文でいわれていることすべてが正しいことをいちばんよく証明している。この現状は、『ちょっとやらせれば』、実際に、クラークを裸にするだけではなく、ついでに中農の誰かも、ときには貧農でさえ捕まえるという明瞭な証拠である」。「貧農〔コムニスト〕にはこの訓令が好みに合っており、彼らの気分を高めたとさえいべきである」。「実際に適用するときにいきすぎがあっても貧農〔コムニスト〕にはこの訓令が非常にお気に入りなのである」。

「訓令には、どちらとも解釈できる不明瞭な条項がいくつかある。しかしながら大半の場合、解釈

---

(96) Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. Т.2. М., 2000. С. 518.

(97) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 276. Вып. 3. Л. 18 об.

ははなはだしく一方向的であり、事態は、中農だけではなく正真正銘の貧農までが選挙権喪失者になるという展開を示しているのである<sup>(98)</sup>」。

明らかに1927年選挙キャンペーンは、コムニストの「茫然自失」を克服する役割を果たした。しかもそれは、「上から」左寄りの命令を出せば、それを一挙に超える力を発揮することを示した。戦時共産主義期の空気が否定されたことを原因として1925年の「茫然自失」が発生したとすれば、「茫然自失」の克服は、戦時共産主義期の空気が継続することを保証するものであった。

1927年5月、選挙キャンペーンが終わったタンボフ県の県委員会機関誌は、コムニストは郷ソヴェト大会のなかで「党の顔」を隠すことはもはやなかったと勝ち誇った総括を出した。「1926年にさえ起こった、かの茫然自失はこの選挙ではほとんど見られなかった<sup>(99)</sup>」。さらにその年の末、第15回党大会で組織報告に立ったスタニスラフ・コシオールは、1924/25年に見られた「茫然自失、分散分化」は全くそのひとかけらも消え失せた、と宣言した。<sup>(100)</sup>

## 8. むすび——1928年へ

1927年党中央委員会2月総会において、カリーニンは、流刑地のチフリスで一緒だったという人物（社会民主党员で、のちに党を離れて農民になった）の手紙に言及した。その手紙の筆者は、農業人民委員部参与会メンバー、カ・デ・サフチェンコの実の兄弟であった。彼は、労働者を雇用していない勤労経営であるにもかかわらず選挙権を剥奪されたとサフチェンコに手紙を送って訴えた。この生の手紙が、カリーニンによって総会で紹介されたのである。<sup>(101)</sup>

カリーニンに鼓舞されたサフチェンコは、5月10日に、スターリン自身宛に、著しく批判的な観点をもつ長大な現状分析を書いた。これは、31日付で農業人民委員部書記局機密セクションを通して送られた極秘の書簡であり、1989年に『ソ連共産党中央委員会イズヴェスチヤ』に公表された。この書簡がしたためられた上記のいきさつからしても、すでにそれは1927年選挙キャンペーンと密接な関係があったことが理解できるが、そのことは、書簡の内容そのものに反映している。

全ロシア大会や全連邦大会の平穏無事な様子にも、いささか考え込んでしまいます。村ソヴェトから県にいたるまで、地方では大会のメンバーが人為的に選別されて（отсевка）います。選挙訓令〔1926年11月の1927年選挙向け訓令。69頁を参照〕はギロチンの役割を果たし、疑わしいものをすべて切り捨てています。おまけに、陳腐な公式見解ではない、あらゆる実際のな、

(98) Деревенский коммунист. 1927. №4 (25 февраля). С. 22, 23.

(99) Коммунист. Тамбов, 1927. №10 (мая). С. 14.

(100) XV съезд ВКП (б). Стен. отчет. М., 1928. С. 95.

(101) РГАСПИ. Ф. 17. Оп. 2. Д. 276. Вып. 3. Л. 18 об.

何の悪意もない意見や提案が、前もってクラーク的なものであると言明されました。醜悪である、非難である、奸計であると決めつけられて、そう言明されたのです。選挙の以前からあらゆるものが訓令によって切り捨てられました。もっとも衷心からの言明も悪魔から出たものだと見なされると予め知っていて、誰が好んで発言し、語り、助言するでしょうか。こんな型にはまった平穩無事がわれわれに必要でしょうか。

ムジークは、われわれの政策と経済体制に沈黙のまま対応しており、家畜を殺し、国家にも、自分にも必要な、あれこれの作物を播種することを止めています。なぜならば、政治も経済もムジークが生産する刺激を与えていないからです。このような状態のために、われわれは危機を警告することができず、事後的に危機に遭遇しているのです。<sup>(102)</sup>

サフチェンコの兄弟がサフチェンコ本人に宛てたもとの手紙には、次のように記されていた。「農民層は崩壊しつつあり、消滅しつつある。……大変な働き者、とくに共同体から独立したものは、食糧税とそれに加えてクラークという不名誉な名前によって特別に監視されており、このため、クラークにならないように労働への熱を非常に強く削がれている。農学的な援助は非常に普及していて、人々は学んでいる。しかし多くの人が、クラークにならないようにとそれを自分の経営に応用することを怖れている。一番の働き者も中農以上になることを怖れている。しかし貧農は水を得た魚のようであり、万年の貧農であり、つまり寄生虫である<sup>(103)</sup>」。基本的にサフチェンコ兄弟の2人はともに「強い経営」の支持者であった。<sup>(104)</sup>

貧農・バトラークの役割を強調し、彼らとコムニストを村ソヴェトに入れようとする努力のなか

---

(102) Известия ЦК КПСС. 1989. № 8. С. 208.

(103) Там же. С. 210.

(104) サフチェンコはスモレンスク県の農民の出身。1925年9月にヴァジマ(スモレンスク県)で開かれた農業博覧会を訪れた印象を『貧農』紙に記しており、それは、彼の農業思想を要約的に示すものとなっている。とくに彼を確信させたのは、根菜類の作付けの重要性であった。その作付けが小規模であっても飼料不足を解決し、輪作体系に根本的な変革をもたらす。このことは、土地不足に直面する農村の問題解決の道を示しているとサフチェンコは論じた。シベリアへの移住という方法ではなく、地元にとどまって集約的な経営をおこなうという「ヴァジマの集約経営者(интенсивники)の例を見習う」方法がこれである。「移住を促進してはならない」と彼は論じた。したがって、農業発展は土地の多いアメリカの道に進むのではなく、小さなデンマークの道に進むべきであった。

ヴァジマの農業博覧会からモスクワに戻った彼は、モスクワ郊外で開かれていた園芸、菜園の博覧会を訪れた。しかしそこに展示されていたのは、農民の創意になるものではなく、専門家の作品であった。「この博覧会は農民の精神をもっていなかった。その成果は大きくないだろうと思う」。モスクワの博覧会は広汎な地域向けのものであったが、ヴァジマの博覧会は郡向けであった。サフチェンコの意見では、郡よりもさらに狭い地区を対象とした博覧会が望ましく、そこにおいて農民の現実的な関心をもっと引きつけるものとなるだろう——これが彼の結論であった(Савченко К.Д. Две выставки // Беднога. 16 октября 1925 г.)。

で、地方の活動は無意識に共通の特性をあらわしていた。それは地方新聞の報道にあらわれた。多数の地方新聞をサーヴェイした 1927 年 3 月の『プラウダ』の一論は、「ほとんどすべての地方の新聞には、非党員の農民アクチーフについて、ソヴェト選挙における彼の役割について一言もないという事実」に注目を促した。<sup>(105)</sup>それは、「ソヴェト活発化」の時代はすでに終わっていることを示していた（「ソヴェト活発化」の終期については、前述 69 頁を参照）。

1920 年代中頃の短期的なプロセスを解明することによって本稿が明らかにしたことは、戦時共産主義期の暴力的な性向はコムニストのなかで消えなかったということである。この性向は、まもなく 1928 年初頭のスターリンの号令によってふたたび火をつけられた。このときスターリンは、穀物調達義務を果たさないコムニストは「党とプロレタリアートに対する根本的な革命的義務の許し難い忘却」の罪を負うと、脅迫に近い指示を地方に送った。<sup>(106)</sup>

税やその他の未納金と自己課税の強制的な徴収、穀物販売の禁止、農家の納屋、地面の下での穀物の探索がまもなくはじまった。穀物非供出者への処罰は、刑法の適用による資産の没収をともなっていたために、はやくも 1928 年初頭からただちに「クラーク清算」の様相を呈しはじめた。裁判にかけると脅す、銃殺すると脅す、ソロフキ（北海ソロヴェツキー島の強制収容所）へ送ると脅迫する等々という事実がただちに起こりはじめた。<sup>(107)</sup>脅迫だけではない。明らかに村からの追放と見られる事実が 1928 年にはやくも実際に起こった。<sup>(108)</sup>これらの事実は全面的集団化に先立っていたのである。

## 参 考 文 献

アルヒーフ資料

GARF. Fond R-393. Op. 1a. Dela 94, 95; Fond A-406. Op. 11. Delo 959.

RGASPI. Fond 17. Op. 2. Dela 127, 154, 197, 276 (vyp. 3); Op. 32. Delo 73; Op. 68. Delo 149; Op. 84. Delo 858.

日刊紙

*Pravda*. 5, 15 February, 5, 14, 16 March, 7 April, 10, 12, 20, 27 May, 5 June 1925; 4 January, 5 February, 16 March 1927.

*Bednota*. 22 October 1924; 16 October 1925.

*Ekonomicheskaja zhizn'*. 10 March 1928.

雑誌論文、研究書など

Boldyrev M.F. *Ozhivlenie sovetov*. M.-L., 1926.

*Bol'shevik*. 1925. No. 3-4.

---

(105) Правда. 16 марта 1927 г. (Г. Шибайло)

(106) Трагедия советской деревни. Т.1. С. 137.

(107) 奥田央「穀物調達危機（2・完）——ソ連 1927/28 農業年度——」（『経済学論集』東京大学経済学会，第 67 巻第 4 号，2002 年），32-33 頁。

(108) Экономическая жизнь. 10 марта 1928 г. 奥田，同上論文，33-34 頁。

- 14-aia konferentsiia RKP (b). Sten. otchet. M., 1925.
- 14 s"ezd VKP (b). Sten. otchet. M.-L., 1926.
- Derevenskii *Kommunist*. 1927. No. 4.
- Istoriia VKP (b). Kratkii kurs. M., 1938.
- Iz istorii zemli Tomskoi. 1925–1929. *Narod i vlast'*. Tomsk, 2000.
- Izбирatel'naia kampaniia v sovery RSFSR v 1924–1925 gg. Vyp. 2. M., 1925.
- Izvestiia Kurskogo gubkoma RKP (b). 1925. No. 8–9.
- Izvestiia Sibirskogo kraevogo komiteta RKP (b). 1925. No. 3; No. 4–5; No. 6–7.
- Izvestiia TsK KPSS. 1989. No. 8.
- Khaletskii A., Zhigalin G. *Ozhivlenie sovetov i zadachi komsomola*. M., 1925.
- Kommunist*. Tambov, 1927. No. 10 (mai).
- KPSS v rezoliutsiakh. Izd. 9-e. Vol. 2. M., 1984; Vol. 4. M., 1984.
- Liapina T.A. Nachalo raskulachivaniia na Tambovshchine // *Obshchestvenno-politicheskaia zhizn' Rossiskoi provintsii. XX vek*. Tambov, 1993.
- Liutov Lev. *Vlast' i obshchestvo v gody NEPa (1922–1929) cherez prizmu nastroyeniia provintsii*. Ul'ianovsk, 2010.
- Molotov V.M. *Vybory v sovery i zadachi rabochego klassa*. L., 1927.
- Na agrarnom fronte*. 1925. No. 5–6; No. 10.
- Nikulin V.V. “Novyi kurs” v derevne: zamysel i real'nost' // *Krest'iane i vlast'*. M.-Tambov, 1996.
- O politicheskom polozenii v derevne i khode seva*. Samara, 1930.
- XV s"ezd VKP (b). Sten. otchet. M., 1928.
- Politbiuro TsK RKP-VKP (b)*. Povestki dnia zasedanii 1919–1952. Vol. 1. M., 2000.
- Rezunov M. *Sel'skie sovery i zemel'nye obshchestva*. M., 1928.
- Riazantsev N.P. *Prevybory sovetov v obshchestvenno-politicheskoi zhizni sovetskoi derevni v seredine 20-kh godov*. Iaroslavl', 1992.
- Rozit D.P. *Proverka raboty nizovogo apparata v derevne*. M., 1926.
- Sel'skoe khoziaistvo na putiakh vosstanoveniia*. M., 1925.
- Sel'sovety i volispolkomy*. M.-L., 1925.
- Sobranie zakonov i rasporyazhenii SSSR*. 1925. No. 1. Art. 3; No. 6. Art. 54.
- “Sovershenno sekretno”: *Lubianka-Stalinu o polozenii v strane*. Vol. 3. Part 1. M., 2002.
- Soveshchanie o novykh zadachakh sovetov v svyazi s shiroko razvernutymsheisia kollektivizatsiei v derevne*. M., 1930.
- Sovetskaia derevnia glazami VChK-OGPU-NKVD*. Vol. 2. M., 2000.
- Stalin I. *Sochineniia*. Vol. 7. M., 1947.
- Tragediia sovetskoi derevni*. Vol. 1. M., 1999.
- 3-i s"ezd Sovetov Soiuzs SSR. Sten. otchet. M., 1925.
- Uchenye zapiski Sverdrovskogo iuridicheskogo instituta*. 1959. Vol. 9.
- Voprosy istorii KPSS*. 1967. No. 11.
- Vsesoiuznoe soveshchanie po voprosam pereybornoi kampanii Sovetov 1929 goda*. M., 1929.
- Zelenin I.E. *Stalinkaia “revoliutsiia sverkhu” posle “velikogo pereloma”. 1930–1939*. M., 2006.

和文文献

- 奥田央『ヴォルガの革命——スターリン統治下のソヴェト農村』東京大学出版会，1996年。[Okuda, Hiroshi, *Volga no Kakumei: Stalin Tochika no Soviet Noson*, University of Tokyo Press. (in Japanese)]
- 奥田央「穀物調達危機（2・完）——ソ連1927/28農業年度」『経済学論集』東京大学経済学会，第67巻第4

- 号, 2002年。[Okuda, Hiroshi, “Kokumotsu Chotatsu Kiki (2・Kan): Soren 1927/28 Nogyo Nendo”, *Keizaigaku Ronshu*, Tokyo Daigaku Keizai Gakkai, Vol. 67, No. 4, 2002. (in Japanese)]
- 奥田央「1920年代におけるソヴェト農村のコムニスト」『経済学論集』東京大学経済学会, 第73巻第1号, 2007年。[Okuda, Hiroshi, “1920 Nendai ni okeru Soviet Noson no Komunisuto”, *Keizaigaku Ronshu*, Tokyo Daigaku Keizai Gakkai, Vol. 73, No. 1, 2007. (in Japanese)]
- 奥田央「犁から靴へ」野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』社会経済評論社, 2012年。[Okuda, Hiroshi, “Suki kara Kaban e”, Koichi Nobe・Jaedong Choi hen, *20 Seiki Russia no Nomin Sekai*, Shakai Keizai Hyoronsha, 2012. (in Japanese)]
- 奥田央「1920年代ロシア農村の社会政治的構造(1)」『経済学論集』東京大学経済学会, 第80巻第1・2号, 2015年。[Okuda, Hiroshi, “1920 Nendai Russia Noson no Shakai Seijiteki Kozo (1)”, *Keizaigaku Ronshu*, Tokyo Daigaku Keizai Gakkai, Vol. 80, Nos. 1・2, 2015. (in Japanese)]
- 奥田央「1920年代ロシア農村の社会政治的構造(2・完)」『経済学論集』東京大学経済学会, 第80巻第3・4号, 2016年。[Okuda, Hiroshi, “1920 Nendai Russia Noson no Shakai Seijiteki Kozo (2・Kan)”, *Keizaigaku Ronshu*, Tokyo Daigaku Keizai Gakkai, Vol. 80, Nos. 3・4, 2016. (in Japanese)]
- 奥田央「『クラーク』と『勤勉な農民』——農村にネップはあったか」『ロシア史研究』ロシア史研究会, 第100号, 2017年。[Okuda, Hiroshi, “‘Kulak’ to ‘Kinben na Nomin’: Noson ni NEP wa Attaka”, *Russia Shi Kenkyu*, No. 100, 2017. (in Japanese)]
- 奥田央「ネップと農村コムニスト」『プロジェクト研究』早稲田大学総合研究機構, 第13号, 2018年。[Okuda, Hiroshi, “NEP to Noson Komunisuto”, *Project Kenkyu*, Waseda Daigaku Sogo Kenkyu Kiko, No. 13, 2018. (in Japanese)]
- 梶川伸一『ボリシェヴィキ権力とロシア農民——戦時共産主義下の農村』ミネルヴァ書房, 1998年。[Kajikawa, Shinichi, *Bolsheviks Kenryoku to Russia Nomin: Senji Kyosanshugika no Noson*, Minerva Shobo. (in Japanese)]

**要旨:** 1924年の党中央委員会10月総会は、「ソヴェト活発化」を宣言し、それまでの農民に対する暴力的、恣意的な統治を終わらせた。しかし党・政府の突然の政策変更は、農村コムニストの不満を引きおこした。本稿は、その後1926–1927年に党が「ソヴェト活発化」の政策を事実上放棄していく過程を論じ、その過程のなかで、戦時共産主義下の農村コムニストに特徴的な「クラーク清算」の志向が基本的に維持されたことを実証する。

**キーワード:** ソヴェト, コムニスト, 選挙, ネップ, 集団化